2018年度　白梅学園大学大学院博士課程　学位審査報告書

学籍番号：B1H002

氏名：寒河江芳枝

学位の種類：　博士（子ども学）

学位論文題目：乳幼児期の要求実現にみられる迂回の意味 ―子ども主体の保育を目指して―

論文審査委員：　（主査）　無藤隆
（副査）　佐久間路子
（副査）　倉持清美
（副査）　近藤幹生

1．論文内容の要旨　（提出者が作成したものを貼り付ける）

2．論文審査の結果の要旨　（Ａ４で１枚程度）

乳幼児期の要求表現にみられる迂回の意味
ー子ども主体の保育を目指してー

B1H002　寒河江芳枝

主査：無藤隆　副査：近藤幹生・佐久間路子・倉持清美

序論

研究の目的

本論文は、乳幼児期の要求表現の過程にみられる「迂回」行動に着目し、その意味を明らかにするものである。そのことを合わせて子ども主体の保育の関係から検討する。「迂回」行動とは、相手との対人交渉を取りながらごまかしたり、はぐらかしたりすることで自分の要求をあきらめるのではなく、自分の要求を間接的に貫き通そうとする要求表現として捉える。

具体的には、以下の3研究を基に進めていく。①第Ⅱ部第1章　一人の対象児の0歳から6歳までの縦断的観察を通して生活の中で葛藤をいかにのりこえるかを検討する。②第Ⅱ部第2章　第1章でみられた迂回行動が、他の子どもにもみられるかどうかを検討すると共に年齢も明らかにする。③第Ⅱ部第3章　保育者は、迂回行動がみられる子どもに対してどのような対応をしているかを検討する。また保育者が、迂回行動を肯定的に捉えることにより子ども主体の保育へとつながることを明らかにする。

研究方法

研究方法は、二つの段階がある。一つは、資料を入手した方法であり、もう一つはその資料を分析する方法である。はじめに、資料を入手した方法について述べる。本研究の観察方法は、参与観察である。参与観察とは、調査対象の中に研究者が入り込んで調査する方法である（柴山,2006)。

次に分析方法について述べる。分析方法としては、事例を詳細に記述する手法を取り入れた。記述については、子どもと伯母、子どもと保育者、保育者と観察者のやりとりを丁寧に書くことである。本研究は、量的な研究ではない。一人ひとりの子どもたちが、どのような行動を示すのかを詳細に捉えることこそが本研究の特徴である。

倫理的配慮

第Ⅱ部第1章は、「日本家政学会誌投稿論文の倫理的観点に基づく審査」を受け承認された。第Ⅱ部第2章と第3章は、「白梅学園大学・短期大学の研究倫理審査委員会」の承認を得ている。

第Ⅰ部　先行研究と本論文の立場

第１章　先行研究Ⅰ－子どもの発達と迂回－

第１節　日常生活場面と実験場面の中でみられる要求表現

乳幼児期の子どもと共に生活する親子のかかわりを見る中で、彼らの子どもたちが自分の要求を通そうといろいろな方法を用いながら親とかかわる姿を目にすることが度々あった。子どもは、要求を他者にどのような方法で伝えるのだろうか。これまでの子どもの要求表現にかかわる先行研究を図示すると以下のようになる（Figure1 参照）。

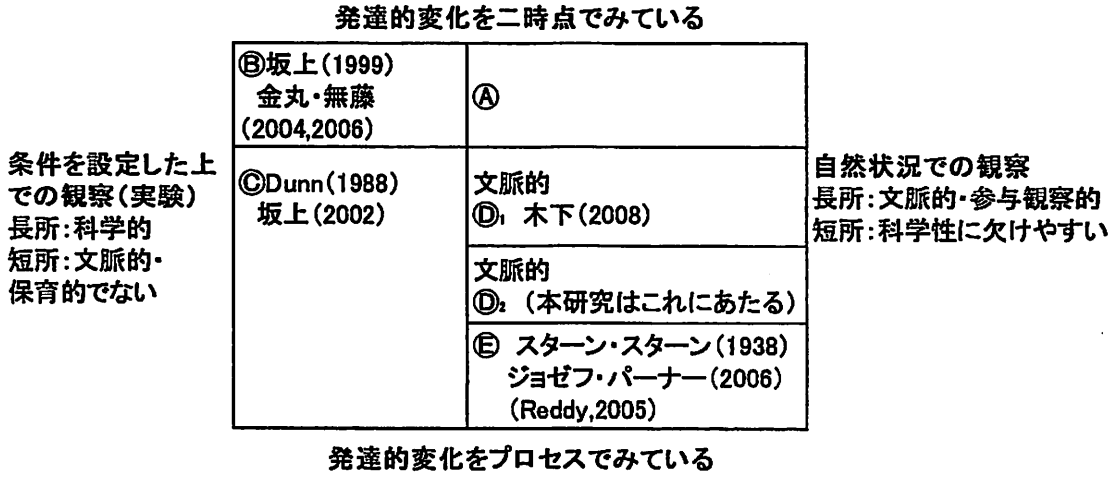

Figure1　自己主張がうまくいかないことへの心理的対象の研究方法

第２節　「心の理論」研究

本研究では、Koehler（1925,1962）の『類人猿の知恵試験』から「迂回」という用語を用いた。Koehler の行動レベルにおけるこの「迂回」を心理学に捉え直すと本研究の「迂回」行動に応用できるのではないかと考えた。Premack らは、Koehler の研究を追究するなかで「心の理論」に辿り着いたのである。現段階では、一般に「心の理論」は４歳以降に理解されることが示唆されている。しかし、Onishi と Baillargeon（2005）は、15 ヶ月児が誤信念課題を理解することができることを明らかにしたのである。「心の理論」においては、現在も研究者の間でこの二つの考え方について議論が続いている。

第３節　子どもの嘘とは？－嘘と迂回の相違の検討－

嘘と迂回は、自発的な行為と反事実という点では、共通している。特に迂回は、2～3 歳に表れるため、2～3 歳の嘘と現象が似ている。自己中心性で自分の要求を間接的に貫き通そうとする要求表現として捉えている。嘘と迂回の調査方法の

もっとも異なっている点は、嘘については実験からも観察からもみられるが、迂回は生活のなかでともに子どもとかかわりながらみえる現象であるということである。

第4節　2歳児における他者とのかかわりに関する研究の動向

2歳児を様々な角度からみると、自己の発達と共に他者とどう向き合っていくかという過程の途中段階のように思われる。その過程の行動レベルでは、不快な感情を抱いたときに単に拒否的行動を示すだけでなく、気紛らわし行動や気晴らし行動がみられることが分かった。

第2章　先行研究Ⅱ－子ども主体の保育と迂回－

第1節　子ども主体をどのように捉えるか

子ども主体の保育とは、主体と客体の関係で考えると主体が子どもにあたる。保育者は、子どもの要求を重視し、子どもの要求から出発する。子どもが、今何を考え、何に興味をもっているのかということを理解すると共に、子どもの立場に立って行う保育が、子どもの今を活かすことにつながる。

第2節　保育学視点からの子ども主体

「迂回」行動は、子どもが要求を実現するための方法である。この行動を保育者がポジティブに捉えることこそが、子ども主体の保育方法として重要であると考えられる。これまでにも、日常生活を過ごす中で、子どもの要求と保育者の要求が一致しない場面への保育者対応の研究は多くみられている。ここでは、6つの研究を取り上げ、子ども主体の保育者対応について述べる。

第3章　本論文の立場

先行研究より、保育学視点からの子ども主体の研究と心理学視点からの子ども主体の研究を整理した結果、保育学視点からの子ども主体の研究では幅広い年齢の子ども主体の保育者の対応方法について整理することができた。一方、心理学視点からの子ども主体においては、特に木下が3歳前後の子どもの重要な姿を述べている。本研究では、この幼児前期から幼児後期に移る大切な時期の迂回と子ども主体の保育を関係づけながら明らかにすることが、本研究の意義につながると考える。以下、本研究の構成である（Figure2参照）。

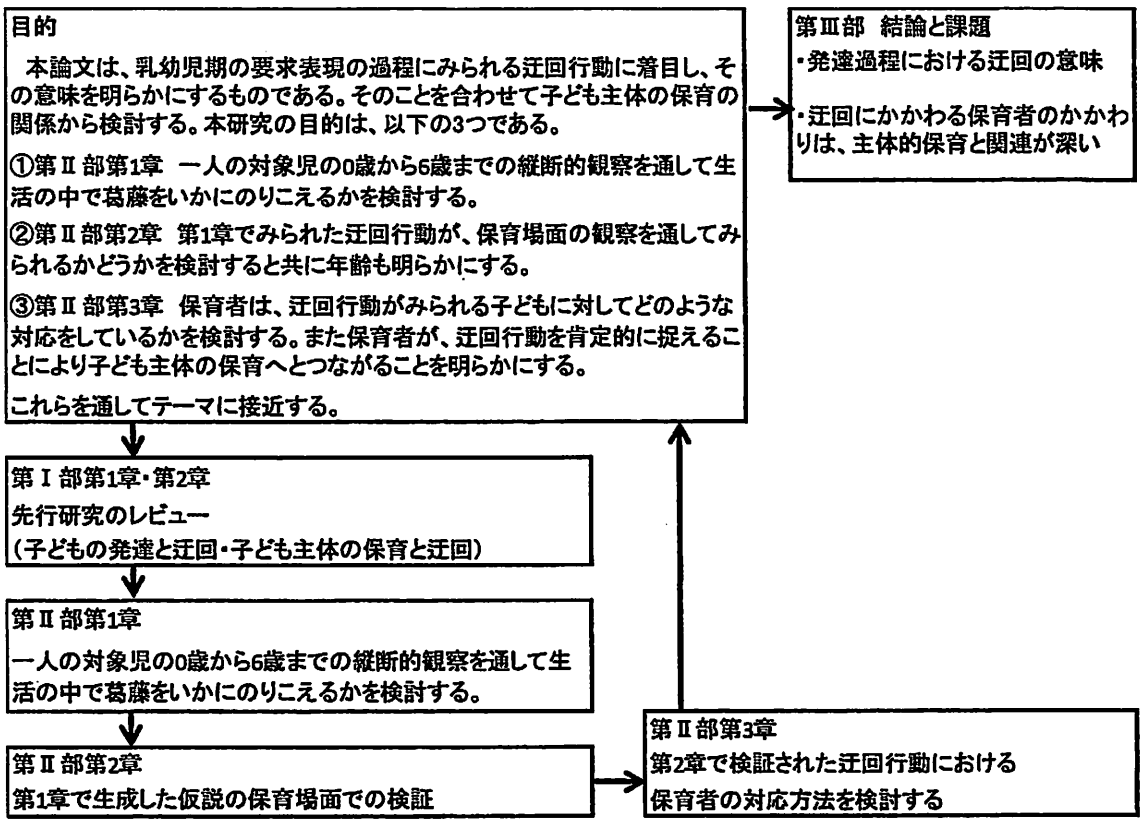

Figure2　本研究の構成

第Ⅱ部　本論－乳幼児期の要求表現と迂回行動－

第１章　乳幼児期における要求表現にみられる葛藤克服方略の発達過程
－誕生から６歳までの日常生活場面の観察を通して－

本研究の目的は、2,3 歳から 5,6 歳までの乳幼児期における要求表現にみられる葛藤とその克服方略の発達過程を、一人の子どもの日常生活場面のプロセスを通して観察した資料を基に明確にすることである。

本研究の結果は、一人の子どもを対象としているが、だからこそ生活の文脈の中で長期的に捉えることができたといえる。分析より明らかになったことは、1 歳児から 2 歳児の前半は直接的な諸表現がみられ、2 歳児の後半に間接（下位カテゴリーの迂回）の兆しが発生し、3～4 歳では間接的な諸表現として上位カテゴリーの「迂回」が表われた。特に 3 歳後半を越えると「迂回」の他に「調整」がみられるようになった。そして、5 歳児になると前の方略を残しつつ初めて言語的思考を介した「自制」による内面的応答が発生した。

第２章　乳幼児期における要求表現にみられる葛藤克服方略の発達過程
－満 3 歳児クラスの観察を通して－

第 2 章では、第 1 章の研究で一児の観察から提起した仮説が、集団の中でもみられるかを検討する。また、補足的に多様性についても明らかにする。さらには、迂回行動が初期の段階である芽生えの時期から中期の段階であるゆらぎの時期へ、そして後期の段階であるゆらぎながら見通しがもてる時期へと変容していくのではないだろうかという点について検討する。

本研究では、集団生活の中で日々生活をしている子どもたちに焦点を当て要求表現の発達過程を捉えていくことにした。ここでは、特に 3～4 歳児にみられる間接的な表現である「迂回」に着目し検討した。着目する場面は、生活移行場面に視点をおいた（伊藤,2014;境,2012;永瀬・倉持,2011）。生活移行場面を取り上げたのは、子どもの要求と保育者の要求が異なる姿がよくみられる場面と考えられるからである。

本研究の結果から明らかになったのは、以下の 3 点である。一点目は、迂回が出現した年齢に関して、2 歳 2 ヶ月～3 歳 2 ヶ月に様々な間接的諸表現がみられた。対象児の年齢は 1 年ぐらいの幅があったが、いずれの子どもにも迂回行動が表れた。しかし、子どもによって迂回行動の種類には差があった。クラス全員の子どもたちが迂回行動を示すようになることが観察されたため、先行研究と一致していることが明らかになった。二点目は、迂回行動の変容は、3 つの段階がみられた。1.迂回の芽生えの時期、2.ゆらぎの時期、3.ゆらぎながら見通しがもてる時期の 3 段階に区分けできた。子どもたちは、集団生活の経験を通して集団生活の在り方を理解するようになった。この間、子どもたちは見通しをもちながら次の活動へ移行する中でゆらぎ、そのゆらぎの中で様々な表現方法を経験することになった。このゆらぎこそ、子どもたちの成長を育む上で重要であることが明らかになった。三つ目は、迂回の種類についてである。一児を対象として行った研究結果は家庭における一人の子どもであり、本研究では集団生活の子どもを対象にしたため、一対一の関係とは異なるより多くの表現が表われた。しかし、ここで留意しなければならない点が二点ある。一点目は、集団効果が子どもたちに刺激を与えることもあるということである。二点目は、様々な迂回行動を表す子どもは、家庭の中でも同じように行動するのかどうかを検討する必要がある。

また、迂回行動の出現状況は、3 場面ともほぼ同じ頻度であった。一番多くみられた行動は「遊び始める」、二番目に多くみられる行動は「様子をうかがう」、三番目に多くみられた行動は「フラフラする」だった。

第 3 章　幼児前期の集団場面における迂回行動と保育者の対応
－子ども主体の保育を目指して－

第 3 章では、「迂回」行動に対して保育者はどのような対応をしているかどう

かを検討する。

研究結果から明らかになったことは3点ある。一点目は、本研究は3つの分類の視点から分析したが、その中で分類①の保育者が対応する中で結果的に子どもが保育者の対応に応じ活動に参加する場合が最も多くみられた。保育者の子どもへの対応方法は、直接的な言葉がけや間接的な言葉がけがみられると共に保育者が“間”を取りながら子どもに対応している姿を読み取ることができた。二点目は、迂回行動はあいまいな行動であることが分かった。このあいまいさが、迂回行動の特徴のようにも思われる。保育者が、そのあいまいさを肯定的に捉えることにより子ども主体の保育へとつながる。三点目は、迂回行動が一瞬の出来事でもあることからトラブルへ課題が移行する場合もみられた。

第Ⅲ部　結論と課題－発達過程における迂回の意味－

結論　発達過程における迂回の意味

1.　総合的考察

本研究は、乳幼児期の要求表現の過程にみられる迂回行動に着目し、その意味を明らかにするものである。そのことを合わせて子ども主体の保育の関係から検討した。

一つ目は、第Ⅱ部第1章「乳幼児期における要求表現にみられる葛藤克服方略の発達過程－誕生から6歳までの日常生活場面の観察を通して－」についてである。1章では、子どもの要求表現は2歳半以前までは直接的表現がみられ、2歳後半以上になると間接的表現の兆しが表われ、3～4歳になると直接的表現と間接的表現がみられ、5歳になると言語的思考を介した高度な直接的要求表現に移行していくのではないかということが示唆された。

二つ目は、第Ⅱ部第2章「乳幼児期における要求表現にみられる葛藤克服方略の発達過程－満3歳児クラスの観察を通して－」についてである。2章では、集団場面の中で迂回行動を検討した結果、クラス全員の子どもたちが迂回行動を示すようになることが観察された。その結果、一児を対象として行った研究結果（第Ⅱ部第1章）と一致していることが明らかになった。また、迂回行動が出現した年齢は、2歳2ヶ月～3歳2ヶ月に様々な間接的諸表現がみられた。対象児の年齢は1年ぐらいの幅があったが、いずれの子どもにも迂回行動がみられた。しかし、子どもによって迂回行動の種類の差がみられた。

三つ目は、第Ⅱ部第3章「幼児前期の集団場面における迂回行動と保育者の対応－子ども主体の保育を目指して－」についてである。保育者は、迂回行動をする子どもに対して直接的な言葉がけや間接的な言葉がけを用いながら様々な対応をしている。迂回自体は、子どもが“間”を取る行動である。その迂回という結

果に対して今度は保育者が、“間”を取った対応をする。このことにより、子どもは自発的に考えを促進していく。子どもは、考える“間”ができる。その“間”の保育者対応として、①保育者が対応する中で結果的に子どもが保育者の対応に応じ活動に参加する場合、②保育者が対応する中で結果的に子どもが保育者の対応に応じない場合、③保育者が対応する中で結果的に保育者の意向に即して子どもを動かす場合がみられた。子どもが“間”を取ることにより、子ども自身が自己を決定する時間であることを理解することができた。また、“間”には子どもと大人の対立を統合する要素があり、相互に相手を見ることを可能にする。さらには、“間”は、水面下の対話の時間とも考えられる。自己を決定する時間は、短時間で決定する場合もあれば、長時間で決定する場合もある。このあいまいさが、迂回行動の特徴のように思われる。

2. 本研究の成果

本研究では、乳幼児期の要求表現を捉える中で発達的に迂回行動がみられることを明らかにしてきた。一人の子どもを対象にした参与観察を通して迂回行動がみられ、且つ複数の子どもたちにも迂回行動がみられるかどうかの観察を行った。観察からは、対象児全ての子どもたちにも迂回行動が表れることが示唆された。しかし、対象者の人数が少ないことからも一般化することは難しい。一般化するにあたっては、今後は対象者を広げ、迂回行動の様相を明らかにするとともに、迂回というあいまいな現象を質的な分析によってさらに探求していきたい。

本研究の成果について図示すると以下の通りである（Figure3 参照）。一つは、一定の年齢の子ども（2～3 歳）は、自分の要求と相手の要求が異なる場合、そらす行為、はぐらかす行為、ごまかす行為、ふりをする行為等を取りながら自分の要求を通そうとする迂回行動を行うことが分かった。もう一つは、大人がそらす行為などを積極的迂回行動として捉え、“間”をおいてかかわることが、子ども主体の保育につながるということを示唆することができた。

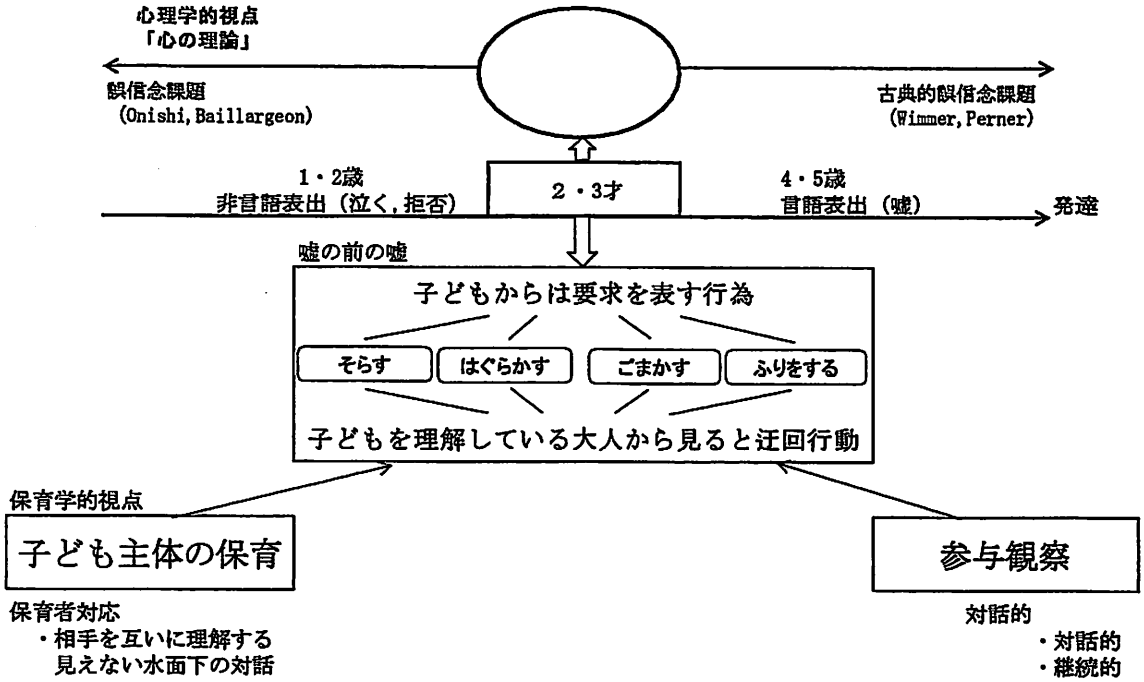

Figure3　本研究の成果

２．論文審査の結果要旨

本論文は、乳幼児期の要求表現にみられる迂回に着目している。迂回行動とは「相手との対人交渉を取りながらごまかしたり、はぐらかしたりすることで自分の要求をあきらめるのではなく、自分の要求を間接的に貫き通そうとする要求表現」と定義されている。この迂回行動について、家庭における一児の 0 歳から 6 歳までの縦断的観察、保育場面における集団を対象とした参与観察を通して、その発達過程を明らかにした。さらに、保育場面における子どもの迂回行動に対する保育者の対応を検討し、保育者が迂回行動を肯定的に捉えることにより子ども主体の保育へとつながることを示唆した。

第一回目の審査会は、2018 年 11 月 9 日 16 時半から開かれた。乳幼児期の要求実現行動に着目し、特に迂回という現象に焦点を当てたという本論文のオリジナルな視点は評価された。しかし、論文中で使用されている用語の意味の説明が不十分であること、事例の取り上げ方と解釈に不明確な点があること、論文の構成において検討が必要であることが指摘され、これらの点を修正することが求められた。

第二回目の審査会は、2019 年 1 月 10 日 18 時半から開かれた。指摘された点は修正されていたが、論文の構成を変更したため、本論文の目的と結論の一貫性が弱くなり、再度の修正が必要となった。また本論文の中心的な発見である迂回行動それ自体に焦点化し、事例に基づく丁寧な論述を加筆することで、より本論文の信頼性や妥当性を高める必要があることが指摘された。これらについて、論文を再修正し、修正内容を再確認した上で公開審査会に進むことが了承された。

第三回目の公開審査会は、2019 年 2 月 15 日 17 時から開かれた。質疑では、迂回行動の定義や年齢に伴う変化について質問が出され、適切に回答された。審査委員からは、迂回という現象に着目し、家庭や保育場面での参与観察を通じて、乳幼児期におけるその発達の様相を詳細に捉えたことが評価された。審査においては、論文中の一部の表現を再度修正することが求められ、それを修正した最終版の提出をもって、合格と判定された。